

SHOW-HISYシネマフルーツ

★★★★★

ロミオとジュリエット パリ・オペラ座 in シネマ 2025	
2025年イギリス映画 配給: 東宝東和／3時間19分(休憩含む)	
2025(令和7)年6月7日鑑賞	大阪ステーションシネマ

Data

2025-52

振付: ケネス・マクミラン

音楽: セルゲイ・プロコフィエフ

出演: 金子美生/ワディム・ムンタ

ギロフ/フランシスコ・セラ

ノ/平野亮一/シャコモ・ロ

ヴェロ/ルーカス・B・フレ

ンツロド/ベネット・ガート

サイド/クリスティーナ・ア

レスティス/ハリス・ベル/

アネット・ブヴォリ/オリヴ

ィア・カウリー/トーマス・

ホワイトヘッド

みどころ

大学2回生の20歳前後の時、京都の映画館で、17歳のオリヴィア・ハッセーがジュリエット役を演じた『ロミオとジュリエット』(68年)を観た時は、その斬新さに胸を震わせ、あの名曲に感動したことを、76歳になった今でもハッキリ覚えている。

それから約55年、3700円のチケットを購入して、英国ロイヤルバレエの本作を鑑賞！シェイクスピアの悲劇が、バレエの踊りとオーケストラだけで本当に表現できるの？2人の最後のバレエは一体どうなるの？そんな思い(心配？)もあったが、日本人のプリンシパル、金子美生と長身の貴公子、ワディム・ムンタギロフの見事なバレエにうつとり！男たちの、剣を振りながらのバレエも見事だ！

日本に居ながらにして本場の英国ロイヤルバレエを大スクリーンで鑑賞できるとは、いい時代になったもの。もっとも、いくら感情表現と演技に力を入れた作品とはいえ、所詮バレエはセリフなし、歌なしだから、その感情表現においてはミュージカルの方が上！？私の本音はそうだが、さて・・・。

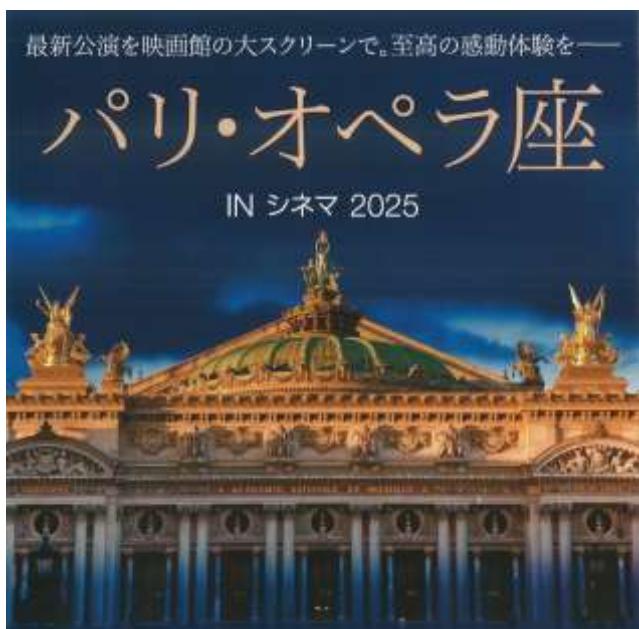
■□大学2回生の青春真っ只中、1968年版映画に大感動！■□

シェイクスピアの『ロミオとジュリエット』を小さい時に小説で読んで知った人は、かなり早熟な文学少年・少女だ。私は、小学生の時に世界文学全集と日本文学全集のほとんどを読んだが、残念ながらその中に『ロミオとジュリエット』は入っていなかった。しかし、なぜかそのストーリーは聞きかじりで知っていたため、青春真っ只中の大学2回生の時に、私は京都の「祇園会館」で、当時17歳のオリヴィア・ハッセーがジュリエット役を演じた『ロミオとジュリエット』(68年)を鑑賞し、大感動を覚えた。

イタリア生まれのフランコ・ゼフィレッリ監督が演出した同作は、『週刊 20 世紀シネマ館』の「No.30」（1968 年（昭和 43 年））で「斬新で現代的な“青春映画”」と表現されている通り素晴らしいものだった。ロミオ役のレナード・ホワイティングは全然覚えていないが、同作では何と言っても、後に布施明と結婚したオリヴィア・ハッセーを一躍有名に！また、今でも私が眠る時に聴いている淀川長治の映画音楽全集の 1 つが、この 1968 年版『ロミオとジュリエット』の映画音楽だ。

■□□ロイヤル・バレエで、日本人がジュリエット役を！■□■

大谷翔平の大リーグのドジャースにおける活躍が目覚ましいが、近時は彼以外にも、打者ではカブスの鈴木誠也、投手では、パドレスのダルビッシュ有こそケガで出遅れているものの、ドジャースの山本由伸、佐々木朗希、メッツの千賀滉大、エンゼルスの菊池雄星、パドレスの松井裕樹、オリオールズの菅野智之ら、それぞれの夢を抱い



て日本のプロ野球から大リーグ（MLB）に渡った日本人選手たちが大活躍を続けている。そのため、かつての村上雅則や野茂英雄が孤軍奮闘していた時代とは隔世の感がある。ちなみに、去る 6/7 に 89 歳亡くなった“ミスタープロ野球”こと長嶋茂雄も、一説では大リーグ挑戦の可能性があったとのことだ。

それはともかく、大谷翔平ほど有名ではないものの、バレエ界における日本人の活躍も近時は華々しい。その結果、本作でジュリエット役を演じたダンサー（プリンスパル）は日本人の金子美生だと知ってビックリ！ロミオ役のワディム・ムンタギロフの長身で貴公子然とした体型に比べると、金子美生はいかにも日本的な体型だから、スタイル面ではもっと素晴らしいダンサーがいるのだろうが、本作の振付をしたケネス・マクミランが何よりも求めた「演技力」という面では彼女の実力は秀逸だから、本作では金子美生のスタイルよりも、そのダンス力と演技力に注目！

■□■踊りの美しさとバレエ技術の奥義をタップリと！■□■

私は2025年2／9に、友人の紹介で、はじめて事務所のすぐ近くのビルの地下1階にある「ミロンガ（アリゼンチタンゴを楽しむダンスサロンのこと）」で、「Live Milonga Tiempo de Tango（タンゴの時間）」を鑑賞した。生の演奏を聴き、ダンスダンサーによるサロンダンスを見るのははじめてだったが、その美しい姿にうつとりしながら、楽しい時間を過ごすことができた。

それに比べれば、私のバレエ鑑賞は10回以上になるが、その度に思うのはバレエの技術の大変さだ。そもそも、つま先で立つこと自体が大変だし、女性だけでなく男性でもあれだけの体の柔らかさをキープするのはそれだけでも大変なことだ。シネマ上映用に編集された本作は約3時間だが、本物の舞台は3幕から構成されている。本作では、ロミオもジュリエットも集団劇のシーン以外はほぼ出突っ張りだから、身体的負担は大変だ。私には2人のバレエの技術面の評論をする能力は全くないが、とにかく2人のバレエの美しさをたっぷりと堪能。

■□■本音はやっぱりバレエよりミュージカル！？■□■

バレエで最も有名な作品は、チャイコフスキーの『白鳥の湖』。そこでは、「情景」や「パ・ド・ドウ」等の名場面が語り継がれ、歴代のプリンスバルたちが見事なバレエを披露し続けている。それに対して、ケネス・マクミランが演出した英国ロイヤルバレエ『ロミオとジュリエット』は、1965年の初演から60年の歴史があるとはいえ、『白鳥の湖』の歴史とは雲泥の差がある。他方、『白鳥の湖』はあくまでバレエを基調とした古典であるのに対し、本作は演劇色を強めた、あくまでケネス・マクミラン流のバレエだから、『白鳥の湖』に登場する妖精や王子様ではなく、シリアルな感情表現が要求されている。とりわけ、第3幕に登場するちょっとした情報不足によって訪れる（？）2人の男女の悲劇は、きっとダンスの振り付けはないはず。するとロミオもジュリエットも“シェイクスピア悲劇”の何たるかを顔と全身で表現する演技が求められるから、ロミオ役のワディム・ムンタギロフもジュリエット役の金子英生も大変だ。

他方、バレエはバレエとして素晴らしいものだから、本作にケチをつけるつもりは毛頭ないが、私の本音はやはりバレエよりミュージカルの方が好きということ。バレエの長所は美しいダンスだが、逆に言えば、セリフもなく歌もないところが短所。その点、松竹新喜劇でも、かつての「てなもんや三度笠」でも、舞台は全てセリフがあるし、ミュージカルはセリフの他に歌があるから、感情表現のバリエーションが豊かだ。また、映画には一体不可分となる映画音楽があるように、ミュージカルではそのミュージカルを代表する名曲の数々が歌い継がれている。その点、バレエはセリフも歌もないだけ、やはり感情表現においては基本的に不利だと言わざるを得ない。したがって、私の本音はやっぱりバレエよりミュージカル！？

2025（令和7）年6月9日記